2011.11.19

No.169

編集　樋口　みな子

E-mail　minginga@agate.plala.or.jp
http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

原発の廃炉は北海道から 612人が提訴しました。

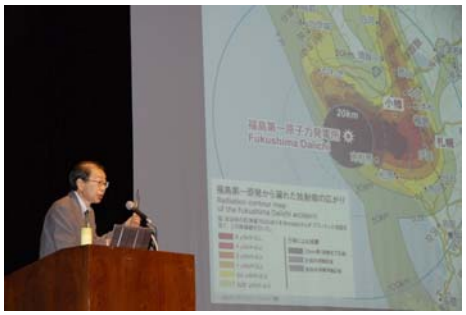
泊原発の廃炉をめざす会の事務局を引き受けてから3ヶ月。11月１１日に北電の泊原発の廃炉を求め、６１２人の原告が札幌地裁に提訴しました。

私は原告にはなっていましたが、寝ても覚めても原告人になる人たちの登録作業や、委任状送付に奮闘することになるとは夢にも思っていませんでした。小さな子どものいるMさんはひっきりなしにかかってくる電話の応対に。家族の介護をしながらのＮさんは、原告になった方たちの賛同金の照合と名簿整理に、私は、メール申し込み者の登録と、本人へのご返事と、事務局の私たちは全力投球で提訴に向けて頑張りました。私たちを支えたのは、世話人代表小野有五さんの多くの人に泊原発の危険性を伝えなければと、全道各地で、手弁当で講演された熱意でした。函館、帯広、旭川、室蘭、釧路、長沼、千歳、余市、赤井川、岩見沢、札幌市内等20回に及びます。講演会のたびに原告になる人、賛同人が増えていったのです。

そうして迎えた提訴日。11月というのに青空が目にしみる暖かな日。109人の原告が教育文化会館に集まり、提訴に至った経過を市川守弘弁護団長から聴き、地裁前に向かいました。

新得から参加した中学３年の原告のＴさんは「泊原発で事故が起きたら、北海道は食糧基地どころか、人も住めなくなる」と訴えました。きちんと自分の意志を伝える姿が頼もしくすてきでした。

今回の訴訟は、人格権に基づいて廃炉を求めます。人格権というのは、自分の生命、身体の安全を守る権利ということを知りました。泊原発は活断層を見落とした状態で安全基準が想定されているので、大きな地震がきたら福島第一原発のような損害を周辺住民のみならず、日本全国の住民に及ぼしかねません。そのため、人格権に基づいて、稼動の差止め、それでも安全が確保されないだろうから、廃炉を求めるのだと弁護士は説明しました。



11.13 提訴記念講演会で図を使って説明する小野有五さん

撮影・市川利美さん（上下共）

福島原発の事故で、25年前のチェルノブイリ事故のことを思い出しました。あの頃、一生懸命、原発の怖さを学んだのに、運動を続けることができなかった悔いが今もあります。私は震災のボランティアには行けなかったけれど、せめて今、未来に生きる子どもたちのために日本中の原発が無くなるように声を出していかなくてはと思います。

山はいつまでも高くそびえていてほしい。海はいつまでも深くたたえていてほしい。空はいつまでも青く澄んでいてほしい。（谷川俊太郎・子どもたちへの遺言から）

（撮影・岡田秀二さん）

10.9 青空に向かってイワオヌプリに仲間と共に登山

「昔、原発というものがあった」池澤夏樹さん

私は池澤夏樹さんが書く小説も評論も好きです。イラク戦争の時は反対の立場で、明快な言葉で私たちにいますべきことを伝え続けました。

11月13日、720人が参加した提訴記念講演会は、一人の読者として聴きました。主催側でしたが池澤さんのお話だけはと耳を傾けました。とても謙虚な作家だなと改めて感じました。半年かけたルポルタージュ「春を恨んだりはしない　震災を巡って考えたこと」には全く触れなかったこと。何度も被災地を訪れ、取材もあるけどボランティアもされたことを、当日買った本を読んで知りました。短い文章なのに読み飛ばせない。3.11に起きたこと、その全体像を全身で受け止めた言葉に、しばし読む手が止まりました。本の中の印象に残った言葉です。「人間は手を差し伸べる存在である」「人間はすべての過去を言葉の形で心の内に持ったまま今を生きる。記憶を保ってゆくのも想像力の働きではないか」

「これらすべてを忘れないこと。今も、これからも、我々の背後には死者たちがいる」友人の医師の話も良かったです。「なんでこんな俺がこんな目にと愚痴を言わない気仙人はあっぱれだ」。その証言の背後にあるのは、すっくと立って生きる自立した精神である。私ならどうだろうと考えさせられました。たぶん不運を嘆くに違いないから。

本の話はこれくらいに、講演は人災である原発事故への考察でした。

核エネルギーを持った社会は滅びると言われていたが、今までのエネルギーとは７桁も違う。万一事故が起こったらとてつもない事故になるのは当然だ。アメリカのアイゼンハワー大統領は原子力の平和利用を唱えたけれど、それは核武装とつながっていた。原発は平和利用だと推進されたが、安全でないことが分かっていたから、ことさらに安全が強調されたのではないか。東海村に見学に行った。パンフレットには固い、丈夫な、密閉、がんじょうな、気密性の高い、厚い、しゃへいという言葉が羅列されていた。事故が起きる前提が最初からないのが原発。ひたすら嘘をつき続けた結果が今回の事故。

東京電力は想定外の津波が来たからと言ったが、800年前に大きな津波はあった。地震で壊れたのではないか。原子炉には無数の配管が通っている。原発は人間の手には負えないのだ。物理を学んだ池澤さんは理の人でもありました。

北海道には風力や太陽光もある。風力による低周波騒音やバードストライクなどの問題点も鳥が嫌う超音波の警戒音を出すなど、解決の方法があるのではないか。社会や技術は人間の意志で変わります。「昔、原発というものがあった」と笑って言える時代に舵を向けていきましょうと結びました。

子どもたちのために、北海道の未来のために、泊原発を止めよう！」小野有五さん

津波の波高と遡上高は違う、10mの津波が38mまで遡上する。地震の原因はプレート運動でプレートの境目で地震が起きる。4つのプレートがぶつかっているのは日本だけだ。こんな場所に原発は作ってはいけない。プレートが重なっているのは静岡県で浜岡原発がもっとも危険。80年代までは日本海側が安全だと思われていたが、日本海中部地震で、日本海側にもプレートの境界があることが明らかになった。北電が調査しているが、泊原発から30ｋｍ圏内では活断層が消えている、そんなおかしなことが各地の原発周辺である。東洋大の渡辺さんは、音波探査によって、泊原発近くの活断層を指摘している。地震は断層の長さに比例するので、M7.5ぐらいの地震が起きる可能性がある。原発より命が大事。力を集めて泊原発を廃炉にしましょうと小野有五さんは結びました。（紙面の都合で特に伝えたい部分だけの要旨です）

メッセージから

講演会途中で、懇親会準備で退席しました。みんなのメッセージが良かったと聴き、後日ユーストリームで拝聴しました。訴訟に加わった宍戸隆子さんのお話を紹介します。福島県伊達市から一家で札幌に自主避難してきた方です。子どもを守るために６月に札幌に来ました。原発事故は、土地、家、暮らしを奪いました。人と人との絆も奪いました。コミュニティも失いました。今後は健康被害も心配。私の生まれた所は富岡町で福島第２原発がある場所です。福島にいる人々を守りたいのです。これからも札幌で受け受け入れて下さい。福島で起きた事故は必ず北海道でも起きます。北海道は希望の大地です。どうか泊を止めてください。詳しい報告はhttp://www.ustream.tv/channel/iwj-hokkaido1でご覧下さい。
又は泊原発の廃炉をめざす会ＨＰ　http://tomari.sakura.ne.jp/index.html

みな子の山旅日記

8月に168号を発行してから2ヶ月半。夏から秋、今朝（11月16日）は初雪が降っていよいよ冬支度です。泊廃炉の会の仕事に明け暮れて、山に登ったのが遠い日のことのようで、記録しなければ、どこの山に登ったのかもはるか彼方に消えてしまいそうです。登山する人にはあまり参考にはならないかも知れませんが、登山しない人にも山の素晴らしさの一端が伝えられたら嬉しいです。

9.10無意根山からの眺望

札幌2番目の高峰　無意根山（1464m）

9月10日、無意根山の薄別コースを登りました。メンバーは5人です。

林道は閉鎖されているので、7:05駐車地点から5ｋｍの長い林道を１時間半かかって歩き、宝来小屋の登山口に到着。アカエゾマツの樹林帯を進むとのびやかな大蛇ヶ原湿原に。モウセンゴケが湿原を彩っていて美しかったです。花は少なくエゾオヤマリンドウ、ツバメオモトの青い実が秋を感じさせます。それから20分で無意根小屋でした。無人でしたが、途中に山小屋があるとホッとしますね。ここからが難所の連続です。７月に同じコースを登ったメンバーは大きなぬかるみに行く手を阻まれて苦労して通過したそうです。今回は、板が敷かれて快適に通過しました。さらに、壁のように立ちはだかる急登にはハシゴがかけられていて、足を滑らせないように慎重に登るとチシマザサのテラスに出ました。札幌岳が雄大です。安心したのもつかの間。笹刈りはされているのですが、ブツブツと笹の太い茎が登山道に突き刺さっていてうっかり滑って転ぼうものなら怪我につながります。私も１回転んで、平らではないので、起きあがるのが大変でした。ハイマツのトンネルをくぐると　頂上でした。途中、左に少し入った所には遭難者を悼むケルンが積まれちょっと引き返した場所には家のような石の祠がありました。札幌の山々が見渡せる素晴らしい場所でした。頂上はすぐそこ。ずっと曇り空だったのに頂上からは360度の眺望。食事をしている間にどんどん晴れて、羊蹄山がすっきりと美しかったです。　ニセコの山々、反対側に札幌岳や狭薄山、恵庭岳も見えて感激でした。

元山分岐で

出会ったのは６組だけ。下山中、周辺を道警のヘリコプターが飛び、誰か笹藪から滑落して怪我でもしたのだろうか？と話しながら、登りよりもさらに慎重に下りました。

無意根尻小屋を少し過ぎたところで木道用の板３枚を担いで登って来た北大山スキー部の学生に出会いました。（左写真）45ｋｇだそうです。細身の青年。彼らが担いで板を敷き、歩きやすくしてくれたことを知り、感謝の思いでいっぱいになりました。長い林道歩きがちょっとつらいけど、変化に富み楽しい山でした。

タイム：駐車地出発7:05　宝来小屋登山口8:30休憩　登山口出発8:45　大蛇ヶ原9:20　無意根小屋9:40　元山分岐10:30　頂上12:10　頂上出発13:10　駐車地点17:00

雨の清掃登山で美瑛富士（1888m）

9.17 美瑛富士避難小屋前で

9月17日早朝４時半江別を出発。雲行きが怪しい。7時に山道入口にはすでにメンバーが揃う。崩れた登山道の補修のための角材を男性陣は背負うというので、彼らのザックの中身を少しずつ私たちも背負うことになりました。最初は小雨程度でしたが、徐々に雨脚も強まり、雨具を身につけての登山になりました。ｇａｎさんらはかなりの急斜面をスイスイと登って行くので、同じペースでついて行くのが大変。メンバーは、日頃、沢登りで鍛えているせいか、全く根をあげません。歩いているときは少しも寒さを感じなかったのに、小屋に入ると一気に汗がひき、寒くてたまらなかったです。すぐに小屋の中で乾いた下着に着替えましたが、低体温症は雨に濡れたら簡単になりうることを実感。夏山であっても予備の下着はザックの中に入れて置かなくてはと思いました。

小屋周辺に散乱しているティッシュを９人で火ばさみで拾いましたが、80以上。せっかくの景観が台無しです。美瑛富士の避難小屋にトイレをと山のトイレを考える会では訴え続けていますが実現していません。せめて使用後のティッシュは持ち帰りましょう。山が泣いています！

美瑛の小さなロッジで、ジンギスカンと、ビールが美味しかったです。

オホーツク分水嶺　藻琴山から小清水峠まで踏査

10.1 藪漕ぎも楽しい

10月1日、藻琴山から小清水峠までの3.6ｋｍの分水嶺を日本山岳会会員36人で踏査しました。私が歩いたのは展望台のある標高735ｍから500ｍの小清水峠までの1.6kmです。12:45出発。

登山道は全くなく、ハイマツと笹やぶをこいで進みました。トップを行くのは京極リーダー。3番手が私です。ちょっと油断すると、ハイマツがバシッと顔をたたきます。しっかり前の人の足についていくが、軽く背丈を超えたハイマツと、足下の幹、左右に長く伸びた枝を払いのけながら進むのに苦労しました。それでも、子どもの頃の探検ごっこを思い出し、楽しかったです。笹が低くなり見通しがきくようになると、私たちの足取りも軽くなり元気に小清水峠に到着。14時45分でした。右手には屈斜路湖が左には斜里岳が見え、後方には藻琴山と素晴らしい眺望に満足し踏査を終えました。

後方は藻琴山

撮影・上から黒川伸一さん、京極紘一さん、岡田秀二さん概念図は京極紘一さん提供

辺計礼山頂上で

翌日（10月2日）は辺計礼山（732m）登山。登山ガイドにもないマイナーな山のようです。

登山道は笹刈りされて快適。カラマツ林も美しい。やがてつづら折りの急斜面になり、頂上はすぐでした。左手に端正な阿寒富士、雌阿寒岳、雄阿寒岳と並び、右奥には、摩周岳と西別岳、遠く左奥には斜里岳が望め、素晴らしい眺望に歓声がわきました。静かな山ですが、こんなにたくさんの会員で、分水嶺の成功を祝えたのも嬉しかったです。

雨の栗駒山（1627.4m）と紅葉の船形山（1500.2m）

忙しい中でも山には登っていましたが、仙台に行くには躊躇する気持ちも大きかったです。でも申し込みは早くにしているし、廃炉の会の委任状送付という大事な仕事を気にかけながら10月14日午後、車に６人が乗り合わせて苫小牧港に向かいました。フェリーでみんなで静かにビールを飲みながら語らったり、思いがけなく素敵なマリンバの演奏も聴け、久しぶりにゆったり過ごせました。

翌日、栗駒のホテルに着くと、全国から170人もの山岳会会員が集まっていました。

宮城支部の支部長さんは、涙ながらに「震災で、被害に遭ったけどたくさんの会員から励ましの手紙や電話をもらい元気をもらった。ここで開催できる運びになって良かった」と挨拶し、会場となったホテルも壊れ、７月に再オープンしたばかりとのこと。震災のボランティアもしていない私が東北に来ていいのかという後ろめたさを吹き飛ばしてくれました。

翌日は栗駒山登山。円錐状の裾野がたおやかな山として知られています。大勢の登山者が登るので、６時にホテルを出発。登山口６時半に出発したが、あいにくの雨。コースも危険が少ないコースに変更になり雨具を身につけて出発。145人が7班に分かれて出発しました。しだいに雨はあがったけれど、栗駒山が望めたのは一瞬でした。１時間40分で頂上に。風も強いので写真だけとり下山。ホテル前で解散になりました。

10月16日（月）、山形県と宮城県の県境に位置する船形山に登りました。山の形が船の形に似ているので名づけられたそうです。色間町から登山口までの林道16ｋｍが長く、Ｔさん運転で慎重に進みました。

ブナ林の紅葉が素晴らしかったです。雑木林の中を緩やかに登って行くと眺望所。ここから登山道の傾斜が増し、固定ロープの張っているところもあります。ハイマツの稜線を過ぎると笹のトンネルはどろんこ道でした。抜けたところが広い山頂でした。蔵王が雄大ですが、他の山が分からないのが残念！避難小屋で休憩し下りは升沢小屋コースを辿りました。沢形で急斜面を足を滑らせないように注意を払いながら、快適に下りました。

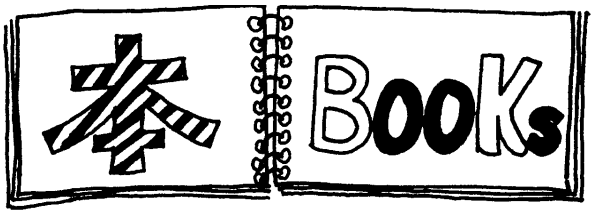
タイム：登山口9:20 分岐10:10 稜線10:50 頂上11:00 頂上出発11:30 升沢小屋12:15 昼食
大滝分岐13:00　登山口13:40

撮影・長谷川雄助さん

登山を終えて、古川駅まで車で送ってもらい、私は一人でＪＲで長い旅をして帰宅しました。新幹線は速くて接続もいいのですが在来線と上手く連動していません。乗ってみて初めて知ったことです。古川～盛岡～新青森と乗り継ぎ函館に行くのは在来線です。全くホームが違うので、迷子になりそうでした。ギリギリに乗り込んだのに函館からは電車がないのです。夜の9j時半から午前1時過ぎまで、快適に過ごせる場所もなく、函館駅で寒さに耐えて待っていました。札幌には午前6時半に着きました。一人旅の心細さも得難い体験になりました。（左写真・船形山登山口の紅葉）

福島　原発と人々

広河隆一著　岩波新書　760円＋税



3.11の福島第一原発のメルトダウン事故。発生直後から現地取材を重ねてきた広河さん。地元住民、事故処理にあたる作業員、避難した人々、放射能の不安の中で暮らす子どもたちの声を取材したルポルタージュです。「DAYS JAPAN]の編集長でもあります。

避難区域の双葉町では、測定器が振り切れるほどの放射能を検出しましたが、「念のための避難」「ただちに健康には影響がない」と住民は繰り返し聞かされ、深刻な事態と受け止めている人が少なかったという事実。住民は猛烈な被曝を強いられたのです。東電や政府によって情報が管理され、必要な情報も多数隠微されたと告発します。

原発作業員はは作業に戻る時こう考えたと言います。「ああ、おそらくこれから死ぬんだろうな。昔の特攻隊員ってこんな気持ちだったんだろうなぁ」と。

福島で暮らす人々の間にも、亀裂が起きているとは、札幌に自主避難してきた宍戸さんの話で知りましたが、かなり深刻です。少なくとも子どもたちには安心して暮らせる場所を確保して欲しいです。転校するのも、そこにとどまらざるを得ない子どもたちに遠慮して、夏休み中に誰にも知られないように引っ越す人たちが多いそうです。マスメディアへの批判も痛烈です。当局の言い分を「そのまま伝えることしかしなかったマスメディアはそれを追随することになるのだ」と。

福島の事故で、原発の安全神話は崩れました。電気は間に合うのです。人間の手に負えない原発は、日本中から無くなって欲しい。福島の苦しみは二度とあってはならないと、この本を読んで、改めて確信しました。私は廃炉訴訟に加わりましたが、いろんな形でたくさんの人たちが繋がって原発なしの安心して暮らせる社会を子どもたちに手渡したいですね。

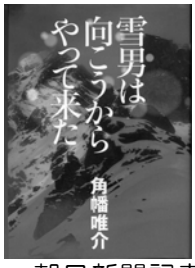
いのち五分五分　息子・山野井泰史と向き合って

山野井孝有著　山と渓谷社　１800円＋税

世界的クライマーである息子、山野井泰史と父である自分（著者）のどちらが先に葬式をするか。この本にはそんな切ない思いが込められています。「泰史と妙子について遺稿出版だけはしたくないのだ。そうではなく、泰史と妙子が元気で挑戦している間にこそ、私とかみさんの思いも同時進行的に書いておこうと思った」とあります。著者は当初、苦しみと不安の30年を書くつもりでいましたが、書き進むうちに、喜びと感激、感動の方がはるかに多かったと語るのです。

登山の無事を知った喜びだけではありません。人間として大きな成長をとげる我が子への感動と誇りが行間から伝わってきます。何度も危険な状況に向き合って、大きな怪我も経験している泰史さんと妙子さん。泰史さんもそうですが、妙子さんは特にまったく自分の業績を誇ったり、偉ぶったりしない人です。泰史さんはいいパートナーを得たなあと思いました。泰史さんと妙子さんはギャチュンカンから奇跡の生還を果たしましたが、妙子さんはほとんどの指を失いました。それでも動く手を使って、料理も洗濯もなんでもします。その努力と工夫に驚かされます。畑で野菜も作っているのです。二人の質素で、謙虚な生き方が清々しく、多くの人たちを引きつけているのも納得です。奥多摩の自宅で毎年、餅つき望年会（忘ではなく希望の望です）にはたくさんの支援者が集まり、妙子さんが何日もかかって料理の準備をする話。１泊４食3000円。お土産までつくという。参加者はもっと多くとったらというのに。そんな参加者たちの発案で、二人の結婚式が奥多摩の自宅で開かれた話も良かったです。

「何故、危険な山をやるんだ」と大げんかもした孝有さん。「登山にかかる費用は親にも誰にももらわない。自力で稼ぐ」と言い切って、富士山での強力でまかなってきた息子です。
数年前には奥多摩の自宅近くでジョギング中に泰史さんはクマに襲われました。その時も、病室で「見つかっても撃たないで欲しいなぁ。クマの親子が上手く逃げてくれればいいが」とつぶやいたというのです。極限でいのちと向き合ってきたから他のいのちにも思いをはせることができるのかと感心しました。
著者は、泰史さんが職と住まいを失った非正規労働者に、見舞金の一部を寄付したいと申し出たエピソードも語ります。限界に挑戦を続ける自分の「いのち」だけでなく、社会のこと、人々の「いのち」にも関心を持っていることを知ったと語ります。
本書の出版に必ずしも賛成ではなかったという泰史さんと妙子さん。二人は父の出版にあたって、「ほかの登山家を引き合いにだすことで、その人を不愉快にさせないで欲しい」と注文をつけたそうです。
親子、夫婦、それぞれの絆の強さ、互いに尊重しあっている姿に感動しました。



雪男は向こうからやって来た

角幡唯介著　集英社　1600円＋税

「空白の五マイル」（2011年2月165号で紹介）で開高健ノンフィクション賞、大宅壮一ノンフィクション賞、梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞した気鋭の作家の２作目が本書です。
表紙の写真がいかにも雪男が出てきそうで印象的。今回の探検はイエティ（雪男）と呼ばれる謎の未確認生物の捜索です。
朝日新聞記者を退職したとき、著者は雪男の捜索隊に誘われます。全く雪男になど興味もなかった著者ですが目撃の歴史やいろいろな人の話を取材を始めると、意外にも目撃したという登山家が多いことを知ります。古くは1951年に、英国のエリック・シプトンがエベレストの偵察時に雪男の足跡を撮影しています。1971年には、ダウラギリ４峰に挑んだ登山家の芳野満彦がグルジャヒマール南東綾で雪男らしき生き物と遭遇しています。田部井淳子も見たという。でもどの著書にも書かれていません。本人に会って話を聴くと気軽に答えてくれたというから驚きです。
圧巻は鈴木紀夫の雪男への執念です。フィリピンで残留日本人の小野田寛郎を発見したことで有名になった鈴木紀夫は6回も雪男捜しに出かけ、ヒマラヤ山中で雪崩で死亡しました。彼の親しい友人や妻、母などに取材して、屈託のない笑顔に隠されていた鈴木紀夫の悲哀が浮かび上がってきて、切なくなりました。著者は「ふとしたささいな出来事がきっかけで、それまでの人生ががらりと変わってしまうことがある。旅先で出会った雪男は、彼らの人生に思いもよらなかった方向に向けさせた。そこから後戻りできる人間はこの世には存在しない」と取材で実感します。
08年イエティ捜索隊（高橋好輝隊長）に加わった著者は、隊員と共にヒルだらけの密林を越え、雪崩の群発する氷河を渡って、ヒマラヤの最深部に入りました。標高4000m以上のところにテントを張り、キャンプしながら、カメラを構え、岩と雪の斜面をひたすら監視し続けるという日々を過ごします。雪男の足跡は今までも数多く公にされているのです。高橋隊長は、雪男の写真にこだわります。不思議なことに、今まで目撃した人たちの写真には、雪男が写っていないのです。
今回も姿は確認されていませんが、明瞭な足跡の撮影に成功しています。捜索隊が撤収した後も残って観測を続けた著者は、鈴木紀夫が何故、雪崩に遭ったのか、現場を見て考えます。
本は、雪男捜索と、雪男を見た人たちの証言を交錯させた巧みな構成で、私もいつのまにか、雪男が現れたらいいなと期待しながらページをめくっていました。
「雪男は向こうからやって来た」の意味が鈴木紀夫や高橋好輝、芳野満彦らの姿や言葉から浮かび上がってくるのです。「わたしは実際の捜索現場ではなく、接した人の姿の中に見たのだ」と。「空白の五マイル」に遜色のない面白さでした。

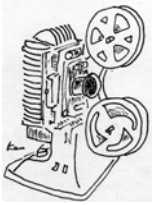
子どもたちの遺言

谷川俊太郎・詩　田淵章三・写真

泊原発の廃炉をめざす会の講演会を各地で行いました。10月13日旭川講演会に私も参加しました。印象的だったのは、若い女性たちが、講演会の準備を一生懸命していたことです。頼もしく思えました。子どもも若い人たちにも、今の時代は生きやすいとは言えません。子ども富貴道のMさんから取り寄せた詩集に切なくなりました。子どもの身になって書いた谷川俊太郎さんの詩集です。田淵さんの写真もとても素敵です。「走る」の一節です。

10. 13旭川講演会場で

ぼくら走る　心の中の見えない道を　息を切らして　汗にまみれて　歌いながら
考えながら　どこなのか分からない　限りない遠くを目指して　ころんだら起きあがる　迷ったら立ち止まり・・・雲を見る　風を聞く　そして話し合う　友だちと
（１面にも谷川俊太郎の詩の一節を載せました）



ライフ　いのちをつなぐ物語

イギリスＢＢＣ　マイケル・ガントン＆マーサ・ホームズ監督

地球に生を受けたさまざまな動物たちが、厳しい自然界で生き抜く姿ががスクリーンに写し出されます。撮影日数は3000日。動物と同じ目線で撮影されていて、実にドラマチックです。

アザラシやチーター、ハネジネズミ、カイツブリ、アイベックス、ハキリアリ等24の動物・生物たちが必死に知恵を絞って命をつなぐ姿を追いかけます。動物の目線だから、自分がその動物になったような不思議な気持ちになります。必死で生き抜く姿に感動しました。

一瞬のチャンをとらえた映像には、動物たちの生きる知恵や親子の愛情が見事にとらえられていて、素晴らしかったです。動物は何も語る訳ではありませんが、人間だけでなく世界中の多様な動物たちも地球の一員なんだと、出会ったことのない動物たちに親近感を覚えました。それにしてもどうやって撮影したんだろう！

もし、ビデオになったら是非ご覧下さい。身近な動物に対する見方が変わります。

黄色い星の子供たち

映写機のカットは河村健さん

仏・独・ハンガリー　ローズ・ボッシュ監督

1942年7月、ナチス占領下のパリで1万3000人ものユダヤ人が一斉検挙されたヴェル・ディブ事件。（冬季競輪場）。95年にようやく仏大統領が政府の責任を認めた史実を描いています。半世紀もの間闇に葬られていたのです。

実話を元に、そうした権力側の意図も折り込みながら、ガス室に送り込まれた子どもたちの運命を見つめます。

11歳の少年ジヨー、子どもたちを守ろうと献身するフランス人看護師のアネット（メラニー・ロラン）まだ幼いノノ。医師（ジャン・レノ）も検挙されます。劣悪な環境で必死に生き延びようとしますが、大人たちだけが別の収容所に送られます。自らの運命を悟ったジョーは仲間を誘って脱走します。生き抜いてと祈るような気持ちで見つめました。

フランスでもこんな残酷なことが行われていたと知ったのは「エレーヌ・ベールの日記」を読んででした。彼女も強制収容所で命を落としましたが、その前に、ユダヤ人の子どもたちを匿う活動をしていたのです。勇気あるパリ市民によって１万人が匿われたといいます。映画は歴史の真実をしっかり見つめて欲しいと訴えています。

生き延びたジヨーのモデルになったジョゼフ・ヴァイスマンさんが来日した時に語りました。閉ざされた心のまま体験を秘して生きてきたが、ある人から、語らないでいることは、同じ体験をして亡くなった人たちの記憶をも断ち切ることになると言われ、悩んだ末、人前で語り始めたこと。人ははどんなに厳しい状況であっても乗り越えることができるのだと勇気づけられました。

９月に観た映画ですが、歴史の真実を知ってもらいたく紹介しました。

僕たちは世界を変えることができない

深作健太監督

原作は葉田甲太。現役の医師です。

医学生の田中甲太（向井理）はカンボジアに学校をというポスターを見てやってみようと仲間に呼びかけると３人が加わり、150万円を集めて学校を建てようと活動を始めます。ディスコに学生をたくさん集めて収益を得るというのが今風。こんな軽いのりで大丈夫なの？と心配になりますが、根は結構真面目です。

彼らが遊び半分でカンボジヤに行ってみると・・　ポル・ポト派の収容所跡や、殺りくした原野には地雷がいくつも埋まっていて、足のない大人や子どもがいっぱいいました。貧しくて学校に通えない子ども達の姿に心痛めます。ちょっと切ない失恋や挫折もあったけど、本当にカンボジアに学校を建ててしまう実行力がいいです。クールな向井理のちょっと頼りない学生に好感が持てました。

伊藤光湖さんのヴァイオリンコンサートに心洗われました。

9.11伊藤光湖さんを囲んで

忙しくても、音楽を聴いたり、映画を観た後は何か心が豊かになったような気持ちになります。

9月11日、厚別にある教会でヴァイオリンコンサートがあるというお誘いで出かけました。パリで活躍する伊藤光湖さんの演奏です。教会の礼拝堂にはたくさんの方が集まっていましたが、観客と光湖さんの距離は近く情感豊かな演奏を心から楽しめました。

選曲はエルガーの愛の挨拶、バッハ　パルティータⅡ　シャコンヌ　クライスラーの愛のよろこび　、愛の悲しみ。伊藤光湖さん作曲のプラネタリウムとＪＲタワーT38 は星がまたたいている様が目に浮かぶようでした。曲についての簡潔な説明とトークも気さくな人柄がにじみ出てとても素敵でした。

晩秋から冬に衣替え

11.4 北大構内の紅葉

10月発行予定の銀河通信がようやく発行できました。泊廃炉の会の事務局員をボランティアで引き受けましたが、1700人を超える会員の登録や問い合わせに応えるのに、毎日が精一杯でした。全員ではありませんが読者のおひとり、おひとりにメールで会員になっていただけませんか？とお願いしました。遠くは石川県や鎌倉、甲府から、北海道は稚内、函館、札幌と20人近くの方から賛同を頂きました。ありがとうございました。今年最後の通信になります。良い新年をお迎え下さい。（みな子）

11.17青空に花が咲いたようでした。

講演「ヒマラヤからみた温暖化　氷河の変動と災害」を聴いて

11月6日、日本山岳会会員でもある北大の渡辺悌二先生の講演を聴いてきました。

今回のお話はヒマラヤの氷河湖が地球温暖化で融けて土砂災害も起こっていることを1987年から24年間、ヒマラヤに通って調査した報告でした。

ヒマラヤには664の氷河があるとのこと。日常に使っている淡水の70パーセントが北極、南極、ヒマラヤの水だそうです。知るとぐっとヒマラヤが身近になりますね。

私も2008年にＪＡＣの環境調査トレッキングでヒマラヤに行ってきました。話題のイムジャ湖は氷河が融けて拡大。その様子をを確かめてくるのが目的でしたが、高山病になったためにイムジャ湖までは行けませんでした.テレビでも何度もイムジャ湖が危ないと放映されましたので観た方も多いと思います。その下流地域で暮らす人びとにとっては、研究者が危ないというならなんとかして欲しいというのももっともです。渡辺先生によれば、今すぐどうなるという状況ではないそうです。そう聞いて安心しました。

日本だけでなく、ネパール、ペルーなど共同で研究を進めています。ペルーも氷河湖の多い国で研究が進んでいて、観光資源や水力発電として活用しているそうです。土砂崩れを起こさないような方法も確立されているとか。

最近、大学の中だけの研究ではなくて、市民にも開かれて身近に考えることができる場が増えてきたことは、とてもいいと思いました。この日は中学生も受講していました。

購読料をありがとうございます。（敬称略）8.29～11.13

助田梨枝子（芽室町）2000円　塩川哲男（札幌市）3000円（18号分）と切手1800円分　大橋晃（札幌市）3000円（18号分）　里見清子（甲府市）5000円（カンパ含む）中川充（札幌市）2000円　小野有五・妙子（札幌市）10000円（カンパ含む）森武昭（狛江市）1000円　梅沢俊・節子（札幌市）1000円とカレンダー　藤本雅子（札幌市）1000円

合計28,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。